



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3737 号 2017.6.25 発行

「子どもも、家も汚くていい！」“毎日かあさん”からのメッセージ

NHN ニュース 2017年6月23日



こちらの漫画、目にしたことがある方も多いのではないのでしょうか？数多くの賞を受賞しアニメや映画にもなった、西原理恵子さんの漫画「毎日かあさん」。

娘をデパートのトイレに落としても動じることなく、暖房機で乾かして帰宅し、くさいとおばあちゃんに叱られるかあさん。叱られても「なるほど、その手があったか」と悪びれることもありません。

西原さんが自分自身の子育てを題材に、日常に起きる出来事を赤裸々に描いた漫画は、子育て中の母親たちから大きな支持を集めてきました。

これまで子どもの成長とともに16年にわたって毎日新聞で連載されてきましたが、今月で連載終了。最終回を迎えます。「毎日かあさん」に救われ、励まされたという母親たちを取材しました。(おはよう日本・三木佳世子ディレクター)



やんちゃな双子男児の母 “この子はこれでいい”

栃木・佐野市に住む本島由美子さん（47）。

中学1年生の双子の男の子、颯人さんと壮太さんの母親です。

長男の颯人さんは、物事へのこだわりが強い傾向があり、小さいころは特にやんちゃで目が離せませんでした。



運動会でいなくなっちゃったり、ダンスをやりたくなくて保育園を逃亡したり…。

当時は「1人で2人を見なくちゃいけないときに、泣けてくることもあった」と言います。

そんなときに、もともと西原さんのファンだった夫の利明さんが買ってきてくれたのが「毎日かあさん」でした。



「真面目に完璧にしようとしている妻が大変そうに見えて、参考とまではいなくても楽しんでもらえたらと思って」と利明さんは当時を振り返ります。

本島さんは、すぐに「毎日かあさん」のとりこになりました。

特に救われたのは、息子たちよりもはるかにやんちゃな男の子が描かれていたこと。



ダンゴ虫を捕ってきては母親の携帯でつぶしてみたり、骨折して腕にギプスをすれば、それをバット代わりに野球をしてみたり…。

そして、あきれながらも、思わず「いやあ、よく飛んでるな。ナイスセンス、いいスイング」と感心するかあさんのリアクションにも、子どもと向き合う時のヒントをもらったといいます。

「うちここまでじゃないぞ、大丈夫って思いながら、毎日かあさんを読んで、またわが子を見て、読んで、見て、その繰り返しで。この子はこれでいいんだよと毎日かあさんを見ることで考えられるようになりました」と本島さんは語りました。

夫って思いながら、毎日かあさんを読んで、またわが子を見て、読んで、見て、その繰り返しで。この子はこれでいいんだよと毎日かあさんを見ることで考えられるようになりました」と本島さんは語りました。



若い世代の母親たちに広がる反響

出版社には、単行本が出るたびに多くの読者から感想が送られてきました。

感想の中には「楽にしてくれた」「有名な生き方本より“生き方の参考書”になります」「子育てバイブル」といった、「毎日かあさん」を支えている人たちの声が多く見られます。

これまで西原さんと同世代の母親たちからの共感の声が多かったといいますが、最近で



は新たに母親になった若い世代からの反響も目立ちます。ワーママ“頑張りすぎず 今を大切に”

そんな1人、子育て真っ最中の浜島朋子さん(33)。透くん(4)と達

生くん(2)を保育園に預け、IT企業で働いていますが、育児に家事にと毎日がいっぱい입니다。

この日も帰宅後、お兄ちゃんが持つ目覚まし時計をほしがる弟に、兄は「だーめーよー」と断りますが、弟はどうしても欲しくて向かっていき…お兄ちゃんに紙袋でたたかれました。

「ちょっと貸してあげなよ、一緒にやろう」仲裁に入る浜島さん。年の差2歳の兄弟はケンカが絶えず、ひとときも休まりません。



夫の寛治さんは平日帰りが遅く、子どもたちを風呂から受け取るくらいしかできません。

「もっと僕に任せてくれればいいのかと胸張って言いたいけれど、仕事で帰りが遅くなかなか言えない」と胸のうちを話してくれました。

毎日をギリギリの歯車で回すことに必死になっていた浜島さん。

「毎日かあさん」のある作品と出会います。

それは、子どもが大きくなった西原さんが、昔を振り返って書いた「思い出の夢」というもの。

かまってほしいとまとわりつく子どもに向き合えなかった自分を思い出し、お母さんがつぶやく言葉が印象的なこの漫画。

浜島さんは「家なんてもっと汚くてよかった、家事もためちやってよかったのを見て、すんと腹落ちした。子どもと接する時間は私のほうが絶対長いから、それを義務と思わずに楽しんだほうが良いとやっと思えるようになったかな」と話してくれました。

も環境も変わっていないということではないでしょうか。

これまでずっと編集を担当してきた、毎日新聞出版の志摩和生さんは「お母さんならこれぐらいして当然という社会の常識というものに、異議を唱え風穴を開けた西原さんの姿勢が多く読者の支持を頂いた」とおっしゃっていました。

また取材を進める中で、男性や子どもなど、お母さん以外の人たちからも共感の声が多く聞かれました。

“大変な状況の中でも、おもしろさを見つけて笑い飛ばす”

西原さんが「毎日かあさん」の中で描いていることは、お母さんにとどまらず多くの人の生き方のヒントになるのかもしれませんが。

10月から、西原さんは、“かあさん”を終えたあとの第二の人生を題材に新しい連載を始めるとのことです。

※西原理恵子さんは、6月26日（月）午後10時～のクローズアップ現代+にご出演の予定です。

マイナンバーの点字が誤表記 改善を求める声



NHK ニュース 2017年6月24日

マイナンバーカードに記された名前の点字が、本来のルールとは違っていることがわかり、視覚障害者でつくる団体から改善を求める声が上がっています。総務省によりますと、原因は点字を作成するソフトがルールを反映していないためだということで、今後、対応を検討するとしています。

点字の表記は、日本点字委員会が表記のルールを定めていますが、マイナ

ンバーカードに名前を点字で記した際、ルールとは違う表記になる場合があることがわかりました。

例えば、「じゅんこ」という名前は、「じゅんこ」と表記されてしまうほか、「さとう」や「ようこ」は「さとー」や「よーこ」と、長音符という音を伸ばす文字を使うルールですが、そうになっていないということです。

これについて視覚障害者でつくる日本盲人会連合は、利用者に混乱を招いたり、誤ったルールの点字が広がりかねないとして、改善してほしいと総務省に伝えたということです。

総務省によりますと、原因は点字で表記するためのソフトに本来のルールが反映されていなかったためだということです。

マイナンバーカードでは、希望すると裏面に点字で名前が記されることになっていて、総務省は「改善を求める声を受けて、今後、対応を検討したい」と話しています。

点字の正しい表記とは

日本点字委員会や、厚生労働省の調査によりますと、日本国内では、およそ3万人の視覚障害者が点字を利用しているとみられるということです。

点字は最大6つの点の組み合わせで作られた文字で、以前は表記のされ方がバラバラでしたが、視覚障害者の団体の代表や学識経験者などで作る日本点字委員会が昭和46年に「日本点字表記法」という統一ルールを定め、これにしたがって表記することになっています。

例えば、「空気」や「さとう」などの「う」は「う」の点字はなく、「くーき」「さとー」などと長音符という音を伸ばす文字を使います。「じゃ」や「じゅ」などの場合、点字では文字の大きさを区別できないため、1文字ずつ表記すると「じや」「じゅ」となってしまうことから、「じゃ」や「じゅ」を表すための文字があって、それを使うことになっています。

広がる点字の活用

点字は、駅の券売機や料金表、階段の手すり、金融機関のATM＝現金自動預け払い機、郵便ポストなど、今や、日々の暮らしに欠かせない場所の多くで使われています。

日本点字図書館によりますと、昭和42年に旧国鉄で近距離乗車券を発行する自動券売機が全面的に導入された際に、料金表示のそばに点字が表記されました。

その後、公共施設での点字の表記が一気に普及し、点字ブロックなどのバリアフリー化も進んだということです。

商品への点字が表示されるようになったのはそのあとで、現在では飲料や加工食品、接着剤まで、さまざまな商品に点字が付けられています。

平成7年には大手酒造メーカー「宝酒造」が誤飲を防ぐため、酒の容器に初めて点字を表記し、その後、ビールや発泡酒の缶など多くの容器に表記されるようになりました。

平成17年にはジャムを製造している「アヲハタ」が18種類の瓶詰めの商品に点字を表記しました。「冷蔵庫から取り出す時に何の瓶か分からない」という消費者の声を受けたため、現在では、26種類の商品に点字がついています。

最近ではおとし、「プリマハム」がハムとベーコンの5つの主力商品のパックに点字を表記しています。

また、住宅設備メーカーの「TOTO」によりますと、温水洗浄トイレでは以前はボタンに点字のシールを貼っていましたが、現在は、最初からボタンに点字を付けているということです。

障害者やお年寄りなど誰もが使いやすいように配慮された「ユニバーサルデザイン」の製品の開発に企業が力を入れる中で、点字が普及しています。

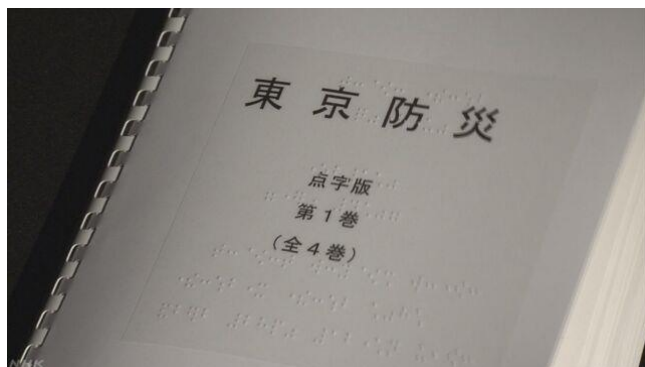
点字を利用する人は

滋賀県彦根市の浅野征三さん（72）は、40歳を過ぎたころに目が見えなくなり始めた「中途失明」で、20年以上、点字を使っています。

浅野さんの身の回りでは洗濯機や温水洗浄トイレ、お風呂を沸かす機械などのほか、調味料などの飲食品にも点字が使われていて、次第に増えていると感じるといいます。

さらに、メールもパソコンを使って点字で打つことが可能で、浅野さんはほとんどの情報を点字から得ています。

浅野さんは小学校などで点字を教える授業をしています。年々、授業の回数は増え、昨年度は7校でしたが、今年度は10校近くになるのではないかと話しています。



防災のために点字を

東日本大震災が発生し、今後も大きな災害が予想されるなか、災害への日ごろの備えや発生時の対応などをまとめたハンドブックなどの点字版をつくる取り組みも各地で進んでいます。

徳島県では、東日本大震災で視覚障害者への情報が不足していたという指摘があったことから、2年後の平成25年に南海トラフの巨大地震など

の大災害に備えるための点字の防災ハンドブックを県の視聴覚障害者支援センターが作り

ました。

宮崎県高鍋町では平成26年に町が東北大学の研究所と連携して作成した防災手帳を、ボランティア団体が点字に訳し、視覚障害者に配りました。東日本大震災の被災者の生の声を反映する形で、被災したあとの対応が時間の経過とともにまとめられています。

東京都の場合、首都直下地震などへの備えをまとめた「東京防災」という冊子を2年前から各世帯に配布しています。

家庭で備蓄すべき物や応急手当の方法など、災害から身を守るための対策をまとめたもので、昨年度は点字版を作りました。防災面での点字の活用も広がっています。



詐欺横行の時代に

詐欺事件が相次ぐ中、新たに点字を導入することで信頼してもらおうという今の時代ならではの取り組みも生まれています。

島根県警察本部では、今年度から県内139の交番と駐在所の署員に名刺の裏やカードに貼る点字シールを配布しました。全国の警察で初めてです。

点字シールには、交番や駐在所の名称や警察官であること、事件や事故、相談があるときの連絡先などが点字で表記されていて、視覚障害者の家を巡回する際に配布します。

きっかけとなったのは平成25年から駐在所に勤めている金山真次巡査長の取り組みです。巡回で訪れた視覚障害者の女性に「本当に警察官かどうかわからない」と点字が入った名刺の提示を求められ、点字が入ったカードを作ることにしました。カードを配ることで不安を取り除き、巡回を続けるうちに、声を覚えてもらったということです。

視覚障害者の女性は「声だけでは、相手が警察官かどうかわからず不安でした。点字の入ったカードで信用することができました」と話しています。

金山巡査長の報告を受け、島根県警察本部は点字カードの導入を徐々に進め、去年4月に障害者への差別の禁止や適切な配慮を求める「障害者差別解消法」が施行されたことを受けて点字を打てる機械を購入し、今年度からすべての交番と駐在所に点字シールを配ることにしたのです。

金山巡査長は「視覚障害者の不安を安心に変えるためにも、全国の警察にこの活動が広がってほしい」と話しています。

マイナンバーカードが

点字が広がる中、マイナンバーカードの点字の表記がルールと違っていることがわかり、視覚障害者からは落胆と改善を求める声が上がっています。

長崎県佐世保市の佐藤順子さんは、平成13年に車の免許を更新する際、視力が著しく低下していると指摘され、病院に行ったところ、目の病気が

わかりました。今では目の前の相手の顔がほとんど見えないといいます。

それでも趣味の読書のために点字を勉強し、読書をしたり日記をつけたりすることができるようになりました。点字が心のよりどころになったといいます。

佐藤さんは去年、市役所の窓口でマイナンバーカードを受け取った際、「さと一じゅんこ」と点字で表記されるところを「さとうじゅんこ」と2か所で誤って表記されていることに



気付き、担当者に伝えましたが、担当者もどうしていいかわからない様子だったといいます。

このため、長崎県の障害者団体などに点字の表記が間違っていることを伝え、改善を要望しました。

点字を入力すると音で読み上げる機械にマイナンバーカードに打たれた佐藤さんの名前を入力すると「さとうじゆんこ」と呼び上げられてしまいます。

佐藤さんは「自分の名前が間違っていたことにはショックを受けました。公的な機関が発行するものなので正しい点字を使ってほしい」と話しています。

また、滋賀県彦根市の浅野さんもことし1月、彦根市役所にマイナンバーカードを受け取りに行った際、「せいぞう」の「う」の表記が誤っていることに気がきました。

学校で点字を教えている浅野さんは、正しい表記で再発行してほしいと、カードを受け取りませんでした。浅野さんは「誤った点字が広がればその情報で思わぬことが起きてしまうかもしれない。点字には正しい表記のルールがあることを国にはわかってほしい」と話していました。

「障害者への理解深めて」 鹿島東部中が課外授業 支援施設職員招き



佐賀新聞 2017年06月25日
鹿島療育園の迎雅？ 嗣施設長の話に真剣な表情で耳を傾ける鹿島東部中の生徒たち＝鹿島市の同校 鹿島市の鹿島東部中（野崎武人校長）で22日、福祉教育の一環として障害者への知識や理解を深める課外授業があった。1年生68人が、同市にある障害者支援施設「鹿島療育園」〈迎雅＝嗣（まさとし）施設長〉の生活相談員たちの話を真剣な表情で聞いた。

授業では、迎施設長が交通事故で障害を負った人物の例を挙げ、「いつそうなるかわからない。（障害者と健常者の）お互いが理解し合い、思いやりの心と助け合いの精神を養うことを大事にしてほしい」と呼び掛けた。さらに、昨年4月に施行された障害者差別解消法についての説明があり、実際に車椅子を使った学習も行った。

迎施設長は「どういう人が障害者と呼ばれているかを知ってほしい。そして法律の理解度を高めてもらえれば」と強調。三原愛結（あゆ）さん（12）は「障害者に対して差別のない社会にしていきたい。そのために自分に何かできることがあれば協力していきたいと感じた」と話した。（小部亮介）

＝は王へんに堂の土が田

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行